

人文学会報

No.71

2013.3.18

鹿兒島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)二二〇一—二二一

事務局 鹿兒島市下伊敷一丁目52番1号 県立短期大学文学科研究室

〈研究室だより〉

県短に着任して

竹本 寛 秋

二〇一二年十月に県短に着任した竹本寛秋と申します。日本語日本文学専攻に所属し、主に日本近代文学の科目を担当しています。文学教育に携わることのできる場所に着任することができ、非常に喜びと同時に責任の重さを感じています。前任校は北海道大学の「高等教育推進機構 高等教育研究所 科学技術コミュニケーション教育研究部門」という舌を噛みそうに長い名前の部局で、主に理系の学生に対するライティング教育や、科学技術について研究者と市民とを双方方向につなぐ場を創る仕事に携わってきました。それ以前は金沢大学の「大学教育開発・支援センター ED・ICT教育推進室」という、これまた舌を噛みそうな名前の部署に所属し、主に文系学生に対

する情報リテラシー教育や、情報機器を活用した教育の可能性に関する研究をしてきました。もともとパソコン好きで、大学院在学中から「会社でライターの仕事してきた経緯もあり、主に、文系と理系の橋渡しをする領域でキャリアを積んできました。これらの仕事を通して、文学の領域にとどまっているだけでは決して触れることのない世界での刺激を数多く受けることができました。ただ、もともとの専攻である日本

近現代文学の教育と研究にかかわりたいという思いは強く、県短にてその願いが叶ったことをとても幸せに感じています。同時に、橋口先生、岩本先生と続く県短の先生方の後任としての責務に大きなプレッシャーも感じています。

着任して未だ五ヶ月程度しか経っておりませんが、卒業論文の指導に関わることができ、県短の学生の熱心さを感じました。

年度途中の赴任でゼミ生には不安や困惑があったことと思いますが、文学科の先生方や前任の岩本先生のご協力のもと、全員が自らのテーマを深く探求して論文を作成す

ることができ、その過程で様々な刺激を受けることができました。自分が大学二年生だった頃を顧みて、これだけのものが書けたらどうかと思います。県短の学生の真剣に課題に取り組む姿勢には驚くばかりでした。二年間という極めて短い期間で一生懸命勉強し社会に出て行く学生達の期待にに応えるべく研鑽を積み重ねていかなばならないと引き締めています。

十月に札幌から鹿兒島に来たということもあり、着任以来「いつ秋が終わるのだろう」という感覚が続いています。「冬」がいつ始まっていて、「春」がいつ始まっているのかいまだによくわかっていません。国語科教育法の模擬授業にて中原中也の「月夜の浜辺」が取り上げられたとき、「月夜の晩に、ボタンが一つ／波打際に、落ちてゐた」という光景の季節について、学生がみな「冬の花」と答えるのを聞いて、言葉の想起するイメージの地域差を感じました。もちろん私の「冬の花」のイメージが基準とならないことはもとよりわかっています。が、同じ言葉が同じイメージを引き寄せる

わけではないことを改めて認識できた出来事でした。文学作品を読むときに、言葉のひとつひとつを文学作品それぞれの文脈の中に置きなおし、丁寧に読んでいくことの重要性を再確認しています。

まだ半年に満たない鹿児島生活ですので、日々が発見の連続です。鹿児島の夏をまだ経験しておらず、ドカ灰はおるか台風ですら体験したことがなく、今から恐怖しておりますが、それも経験と考えて新たな環境での教育研究に努めていきたいと考えています。

（文学科日本語日本文学専攻 准教授）

卒業にあたって

二年間を振り返って

文学科日本語日本文学専攻

宮原 加代子

二年間の短大生活も残りわずかとなり、四月から私は社会人として働き始めます。私にとって県短での二年間はとても充実したものでした。そこで卒業を前に県短での学生生活を振り返ってみようと思います。

県短に入学した当初は高校よりも自由な短大の学生生活に開放感を感じながらも、初めての電車通学や九十分間の授業に慣れることに苦労しました。また、私の所属していた専攻は五十人と多かったため、初めの頃は名前と顔が一致せず、覚えるのに必死でした。しかしそのような新しい環境にも徐々に慣れていき、毎日がとても楽しく感じられるようになっていきました。県短に入学するまでは、短大は忙しく自分の時間がとれないというイメージを持っていたため、実際に学校が始まると、バイトの時間も自由な時間も十分に取れることにとっても安心したことを覚えています。

一年生の後期に行われた文化祭では、私たちの専攻はダンスをしました。ダンスの

曲や衣装を決めたり、学校が終わった後に公園に集まってダンスの練習をしたりと、それまであまり話したことのない仲間と同じ専攻の人とも話す良い機会になりました。本番のダンスも成功させることができ、とても楽しい思い出となりました。

一年生の冬休みからは本格的に就職活動を始めました。私はそれまで自分の進路についてあまり真剣に考えていませんでした。しかしキャリアデザインなどで就職氷河期であることや先輩方の就職活動の体験談を聞き、自分は就職することができるのだらうかという不安を感じ、時間にゆとりのある冬休みを使って就職活動を始めました。県短でのマナー指導に始まり、履歴書添削、就活サイトからの企業へのエントリー、会社説明会への参加、会社訪問など様々な活動をしました。まだ就職活動を始めている短大生が少ない時期に就職活動を始めたため、企業の方に自分のことを覚えてもらいやすかったり、就職活動に詳しい大学生から役立つ情報をもらえたりと、得をするところが多かったように感じます。そして二年生にあがる前に無事内定をいただくことができました。私は就職活動を通して、様々な面において自分自身が大きく成長ように感じています。とても親身になって様々な

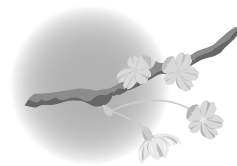


アドバイスをして頂いた学生課の先生方に感謝しています。

一年生の後期からはゼミ分けがあり、卒業論文の準備が始まりました。私は以前から芥川龍之介の作品で論文を書きたいと考えていたため、芥川龍之介の作品を中心に題材となる作品探しをしました。しかし、なかなか自分の気に入った作品が見つからず、やっと題材となる作品が見つかった頃には論文で使用する先行研究探しが始まり、毎日がとても忙しかったことを覚えています。二年生からは本格的に論文の作成が始まり、ゼミの先生からアドバイスをいただいたり、ゼミの仲間と論文の読み合わせやアドバイスをしながら一年かけて卒業論文を完成させることができました。卒業論文の作成は大変な作業でしたが、最終的に自分の納得のいく論文を完成させることができ、嬉しく思っています。

県短での二年間はあっという間でしたが、私にとって楽しく充実したものでした。そして、大きく成長した二年間でもありました。四年制大学の学生をうらやましく感じることがありましたが、私は県短に入学して本当に良かったと思っています。私は卒業して四月からは社会人として働き始めま

す。現在は入社後に必要な資格試験の取得や研修が始まっています。これから社会人として働き始めることに期待もありますが、不安も感じています。しかし、不安に押しつぶされることなく、県短で学んだことを活かしながら、新社会人としてしっかりと頑張っていきたいと思います。同じ専攻として二年間過ごした皆さんやお世話になった先生方、ありがとうございました。



短大生活の短い二年間

文学科日本語日本文学専攻

吉行 楓

私は短大生活の二年間、デジカメを買ったり、少し遠いところへ友人と旅行したり、小さなことから大きなことまで様々なことに挑戦するように心がけました。その中でも特に心に残っているのは、知覧特攻平和会館を訪れたことです。

私は一度、中学生の時にそこを訪れたこ

とがありました。が、「もう一度訪れたい」とずっと思っていました。短大一年生の時に、同じく友人も特攻平和会館を訪れたいと思っていることが分かり、その友人と再び知覧特攻平和会館を訪れました。中学生の時に訪れた時は自分と年が近い人々も戦争に参加していたことに衝撃を受け、また彼らの遺書などを読みながら、戦争を初めてリアルに感じることができました。それまでは、「戦争」というものを耳にしても、二度と繰り返してはいけない過去の惨劇としか認識していませんでしたし、「特攻隊」という存在すら知らない状態でした。しかし、短期大学生になって自分が彼らと同年代になってから訪れてみると、特攻隊の存在の大きさに気付き、兵器のように扱われても一人の人間として私達と同じように様々な勉強をしていて、彼らを「若いのに様々なことを我慢して戦争に参加していた特別な人々」より、「私と同じように普通の生活を送っていた人々」ととらえる概念が生まれ、より身近に感じるようになっていきました。

また、特攻隊に関する本も図書館で借りたり、購入したりしてたくさん読んで、友人と特攻隊の映画をDVDで見たりして、彼らも本当は生きたかったのだということ

した楽しい二年間を送ってください。



学ばないことを学んだ二年間

文学科英語英文学専攻

濱 元 星 見

に気づきました。遺書だけでは分からない姿を、彼らの心の奥に隠された本心を、友人や家族の証言から見ることができました。また、平和会館に展示されている写真には、隊員たちの恐怖や不安を感じさせない笑顔が収められており、残り少ない時間を全力で謳歌しているように思えました。しかし、実際は出撃の恐怖から夜中に涙を流す隊員もいたと知り、「彼らも心残りがあったのだ、時代が違えばたくさん遊んでいられる年頃なのだ」と思うと痛ましく、心苦しい気持ちがありました。若い男性の方々が国のため、家族のためと言って身を投じていったこと、長くは生きられなかった現実の辛さ悲しさをいろいろな角度から知ることができ、このことから、時間はとても大切に貴重なものなのだと思うようになりました。

短期大学生としての二年間は想像通り、本当に短い二年間です。その中でも、できることはたくさんあると思います。様々なことに挑戦して、特に興味を持てることを極められるだけの時間を持てる、人生の中でも数少ないとても貴重な二年間だと思います。様々なことを経験し、いろいろな場所に足を運び、チャレンジして、是非充実

鹿兒島県立短期大学で過ごした日々はこれからの自分を見つける上で重要なポイントとなった時間でした。

短大Ⅱ女子というイメージがあり、第一志望の大学に落ちた時は正直入学することに大きな不安がありました。そしていまい何がしたいという具体的な目標もありませんでした。英語をしてみたいという気持ちで決めた英語英文学専攻でいったい何ができるのかもあまりはつきりと見えてはいませんでした。

いざ短大生活が始まると、最初の一年はあつという間に過ぎてしまいました。毎日の授業、サークル活動、アルバイトなど短

大の生活を満喫でき、クラスの仲間も男女関係なく接してくれたので、毎日楽しく過ごすことができました。

しかし、短大の生活は短く、二年生になりそれぞれ就職や編入と自分の将来について考えなければならぬ時期がすぐにやってきました。ほとんどの人が就職を希望していましたが、私は、入学当初から編入を希望していました。しかし私の編入に対する気持ちは大学受験で失敗した悔しさが生み出したものだったように思います。こつこつと英語を勉強していましたが、ただそれは試験に合格するためだけのものになっていました。

しかし、私の考えは県短で大きく変わりました。そのきっかけとなったのは、ゼミの存在です。先生との距離が縮まり、様々な考えを学んだり、意見を交わす機会が大幅に増えました。それはとても刺激的な事でした。卒業研究をする際に、私の先生は自分の好きなものについて自由に調べていってほしいとくれました。私は自分の好きなファッションブランドについて調べました。自分で問題点を設定して、それを立証していくために様々なことを調べ、自分の考えを述べる、このような機会はこれまでの人生の中でほとんどありませんでした。調べれ

県短での二年間

文学科英語英文学専攻

谷 二元 南 月

ば調べるほど、考えれば考えるほど、様々な知識が自分の中に蓄積され、自分の考えを持つことで一種の達成感を味わうことができました。その時、これが「学ぶ」ということなんだと実感することができました。

また、英文専攻の様々な講義の中で英語史、音声学、比較文化や英米文学史など幅広く触れることができ、英語だけではなくその背景にある文化や社会、歴史を同時に学ぶことで英語への興味がさらに強くなりました。

編入試験へ向けての勉強も自分自身を変えるきっかけとなりました。編入試験には志望理由書が付きものです。その時、自分の編入についてより深く考えるようになりました。多くの先生方からアドバイスやアイデアをもらい、添削を繰り返ししてもらうことで少しずつ何がしたいのか明確に文章に起こすことができるようになりました。何か学んでみたいという気持ちがあったからこそ編入です。今まで短大で学んだことが自分の目標を見つける助けになり、志望理由書を書くことで自分自身を見つめ直すいい機会にもなりました。また、県短で学ぶことの楽しさ、大切さを学び、自分の進むべき道を明確にすることで、次に進む四年制大学で学ぶための基盤をしっかりと

築くことができました。

短大に入学するまで、勉強を心から楽しいと感じたことはなかったのですが、今は知らない世界をもっともっと学んでみたい気持ちでいっぱいです。私は編入する大学でまた多くの事を学べるチャンスをもたらすことができました。このチャンスを生かせるようこれからも日々努力していきたいです。

この二年間、私を励まし支えてくれた両親、にぎやかでやさしいクラスの友達、個人的で尊敬できる先生方、学校生活をサポートしてくれた教務課、学生課の方々など、すべての方々から感謝しています。また、多くの人に助けられ、支えてもらい今の自分がいるということを忘れずに生きていきたいと思います。二年間ありがとうございました。



長いようで短かった県短での生活が終わりを迎えようとしています。卒論も完成し、最後の定期試験も終わり、残すは卒業式のみです。この二年間を振り返ると、いろいろな経験をし、充実した短大生活を送ることができたように感じます。高校時代から英語を専門に学んできた私は、英語学や英文学などを二年間で幅広く学ぶことができ、県短の英語英文学専攻に魅力を感じ、受験することを決めました。合格をいただき入学してみると、初めは高校時代との違いに戸惑うこともありましたが。授業は自分で選択して履修したり授業時間は90分になったり、課題で出されるレポートさえも初めは書くことに大変苦労しました。しかし、時が経つにつれて慣れていき、県短での生活がとても楽しく充実したものになりました。

一年生の夏休みには、異文化コミュニケーションの研修でハワイに行きました。私にとって初めてのハワイではなかったけれど、英語を使ってコミュニケーションをとり、ハワイの文化や歴史を現地でも触れなが

ら学んでみたいと思い、参加しました。現地の大学に行って授業を受けたり、観光名所に行ったり、休日には友人と買い物やビーチに行ったりして、楽しい時間を過ごすことができ、いい思い出になりました。

私は中学校英語教諭の免許状取得を目標にし、教職課程の授業も履修してきました。

二年生の五月から六月にかけて、母校の中学校で三週間の教育実習を行いました。たった五年前に卒業したばかりの中学校の教壇に立って私が英語を教えているなんて、まるで夢のようでした。生徒たちは未熟な私の授業を毎回真剣に受けてくれるので、とても嬉しかったです。この三週間の実習で多くのことを学んで、私自身大きく成長できたように感じます。私の人生の大きな経験になりました。

私が本格的に就職活動を始めたのは、八月になってからでした。教員採用試験を終えて、そろそろ就職活動に専念しなければと焦り始めていたときに、ふと目に留まった求人がありました。そして、その求人先が私の内定先となったのです。八月は学生課の方に履歴書添削や面接指導を熱心にしていただきました。面接指導の際、学生課の方に「受け答えはあまり良いとは言えないけれど、笑顔が良い。好印象を与えるも

のがある。」と言っていたことを今でも覚えています。九月に就職試験があり、笑顔を大切にして私なりに一生懸命自分をアピールしました。その結果、内定をいただくことができました。内定通知が届いた時には、言葉が出ないくらい嬉しかったです。

二年生の後期が始まり、毎日あった授業は週二日となり、時間と気持ちに余裕ができました。それまでは短期のアルバイトしかしていなかったけれど、時間を有効活用したい、また、就職するまでに社会勉強をしたいと思い、飲食店でアルバイトを始めました。また、後期が始まると本格的に卒業論文を書き始めました。私の卒業研究のテーマは『0歳からのバイリンガル教育』です。高校一年生の時に短期留学でシアトルに行った際に、アメリカ人と日本人の国際結婚の家族に出会ったことがきっかけです。その家族の子どもたちが日本語と英語のバイリンガルだったことに感動し、憧れを抱きました。研究や論文が辛くてくじけそうになったこともあるけれど、ゼミの先生に温かくご指導していただきながら、同じゼミの友人たちと励ましあいながら頑張りました。何時間もパソコンと向き合い、英語で論文を書き終えた時には、達成感で

いっぱいでした。

振り返ってみると、本当に充実して楽しい二年間でした。英文のみんなと過ごした日々は私の大切な宝物です。そして英文のみんなは、いつまでも私の大切な友達です。春からはそれぞれ違う道を行くので寂しい気持ちもありますが、前を向いてしっかりと進んでいきたいと思えます。

これまで私を支えてくださったすべての方々に、心から感謝しています。これからも私らしく、より一層精進していきたいと思えます。本当にありがとうございます。



〈平成24年度卒業研究標題〉

文学科日本語日本文学専攻

《木戸ゼミ……日本文学・古典》

内田 有香 『和泉式部日記』における〈世評〉の役割

岡元 あい 『更級日記』の物語と夢と信仰の関係性について

楳田 美希 とりかへばや物語―とりかへ―における物語終末の捉え方―

川畑 慧理佳 『更級日記』からみる孝標女晩年の信仰の形

白石 有香 『とりかへばや物語』における姫君の本心と周りの反応について

永重 佑紀 『とりかへばや物語』における女君の主人公性―苦悩を乗り越える女君―

中山 学美 『宇治拾遺物語』鬼に瘧取らるること―説話にしかみられない魅力―

平野 真帆 あこぎの存在意義からみる『落窪物語』の読者層

山下 琴乃 『源氏物語』夕顔巻における「いとをかしげなる女」の正体

山下 未紗季 『竹取物語』におけるかぐや姫の天人性・人間性による贖罪の考察

吉行 楓 『とりかへばや物語』の評価と男女観の関係についての研究

《竹本ゼミ……日本文学・近代》

稲村 美花 中原中也「つものメルヘン論」―表現方法から読み取る肉親の死―

上田 杏里 谷崎潤一郎「春琴抄」―構造と語り手―

小原 杏奈 中島敦「山月記」―作中における人間の意味について―

佐野 彩夏 『道化の華』論―太宰治における手法としての「道化」と「死」の意味―

下園 志帆児 司馬遼太郎「燃えよ剣」―司馬の人物観と歴史小説―

知念 千里 芥川龍之介「私の出遇つた事」―「蜜柑」「沼地」の比較と評価―

塚田 美佳 森鷗外「舞姫」論

長 蘭典美 谷崎潤一郎「刺青」論―「語り」から読み取る登場人物の異常性―

丸山 絵梨奈 川端康成「雪国」における〈現実〉

宮原 加代子 芥川龍之介「蜃気楼」―意識の閥の外に見えるもの―

《土肥ゼミ……中国文学》

安 楽 優 香 主人公からみる魯迅作品

海 野 成 美 政治と文学の二つの側面から見る曹操の人物像

清水 聡 子 『世説新語』に見える山濤

田 代 唯 資料から読み取る富山弥兵衛について―新選組にいた薩摩隼人―

西 村 まどか 初唐の三大作家各人の書論―評価の相違とその変遷―

藤 山 奈 津 李白と杜甫の関係についての研究

前 田 あかね 昔話を通して見る日中の国民性―浦島物語を基準として―

松 元 綾 花 小説中における唐代の婚姻制度

南 園 梨 佳 お茶の歴史から見る共通点

《望月ゼミ……日本語学、上代文学》

川 原 み ゆ 歌謡曲における直喩の研究―昭和後半と平成との比較―

木 村 茉 里 子 『千と千尋の神隠し』と役割語

下 麥 あゆみ 記紀間におけるヤマトタケル像の相違点を探る

白 石 さくら 『絵本』におけるオノマトペ―3つの観点から―

徳 丸 春 菜 『古事記』に出現する色彩語についての研究

平 井 朋 生 日本語のオノマトペと英語表現の比較

福 元 あかり 男女語・若者語の変化に見る若者の様相

益 田 誉 子 芥川龍之介の表記に関する研究―「蜘蛛の糸」・「鼻」の自筆原稿による―

道 上 絵 里 奈 「うちの三姉妹」から見る幼児語と幼児の言い間違いの分析

吉 元 悠 莉 動物に関することわざ・慣用語の日中比較考察

《楊ゼミ……日本語学、日本語教育学》

稲 付 恵 理 メディアにおける相づちについて

江 藤 智 恵 時代劇の役割語について

起 若 奈 「断り表現」について―内容の負担度に注目して―

海 江 田 紗 也 告白セリフの差による告白者に対する感情の変化

下 園 秋 穂 漫画から見る擬音語・擬態語(オノマトペ)比較

谷 口 真 菜 現代の若者の使用する一人称に関する研究

鶴 窪 真 実 一人称の使い分けと男女におけるイメージの差異についての考察―

中 間 あ かね 10代後半女性におけるほかし言葉の語用論的機能―「とか」に注目して―

福 元 瑞 紀 ジャパニーズポップスに見られる聞き間違いについての研究

米 山 喜 美 子 親疎差が携帯メールコミュニケーションの表現に与える影響について

終助詞「ね」と親近感について

<平成24年度卒業研究標題>

文学科英語英文学専攻

氏名

卒業研究標題

《英米文学演習》（指導教員：轟 義昭）

- 上原 夕佳 H. G. ウェルズの科学への想い
久保田 亜佑 ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』の研究
橋口 真由 J. K. ローリング『ハリーポッター』における魔法の役割
濱ノ上 由樹 『分別と多感』におけるジェイン・オースティンの恋愛観と結婚観
福島 美穂 G. オーウェル『動物農場』の研究

《英米文学演習》（指導教員：フィリップ・アダメック）

- 川元 結衣 The Sober Comedy of Steven Wright
木村 龍之介 St. Vincent: A Unique Singer-Songwriter
寺前 舞和 The Ideal State of Religion in an International Society through the 9.11 Attacks
濱元 星見 Encountering Marimekko

《比較文化演習》（指導教員：中谷 彩一郎）

- 大久保 恵美 お茶を楽しむ
島田 瑠美 トイレの文化
徳永 早紀 日本とアメリカのバレンタインデー
西 智子 アニメーション映画 ディズニーとジブリ
宮田 優菜 『バットマンビギンズ』と『ダークナイト』の原作から見るバットマン作品の比較と変化
元山 弥香 日本昔話とペロウ童話の比較
吉田 小都美 ディズニー版『アラジン』と原作『千一夜物語～アラジンと魔法のランプ～』内容比較

《英語学演習》（指導教員：久木田 美枝子）

- 下野 静恵 Survey on Medical Interpreters
谷元 南月 The Bilingual Education for Infants under 12 Months of Age
鳥丸 晴朱 Communicative Means beyond Language
羽生 安那 An Ideal Bilingual
平田 綾 Differences in English Education between Japan and South Korea
前田 智子 Early English Education in Japan and South Korea
宮前 真実子 Beautiful Japanese and its Sensitivity

《英語学演習》（指導教員：遠峯 伸一郎）

- 井上 愛菜 男ことば、女ことば
新屋敷 珠実 『カンタベリー物語』における色の語彙について
恒吉 里菜 『ローマの休日』における丁寧表現
濱崎 可奈 1歳から3歳の子どもの言語獲得～goとcome～
宝泉 菜々 スタジオジブリ作品と日本文学中の借用語と英訳表現
森 いちこ 『ロミオ+ジュリエット』と現代のことわざに見る太陽と月の比喩的意味